

(2) 各学系の研究

① 学校教育学系

ア 研究の特色

学校教育学系は、教育哲学、教育社会学、道徳教育、キャリア教育、生徒指導・教育相談、教育経営学、教育制度・行政学、教育方法臨床、学習過程臨床、情報教育、総合学習、教育実践、教育心理学、発達心理学、学校社会心理学、幼児教育学、幼児心理学、保育内容の研究、生活科教育学（上越教育大学教育研究組織規則【最終改正平成31年3月22日規則第4号】第3条による）を主な研究領域としており、教員養成大学としての本学の教育・研究の根幹をなす研究領域を幅広く担いながら、それぞれの専門領域の立場から教育実践研究に取り組んでいる。全学的な教職必修科目を担当する教員も多い。加えて、国・地方自治体、地域社会、学校等に至る、全国の教員研修や講演会の講師も数多く手がけており、学術研究にとどまらず、実践的・臨床的な視点を携えながら、広く学校現場に開かれた研究活動に取り組んでいる。専門職学位課程の教員は、「学校支援フィールドワーク」を中心として、学部生・大学院生の指導のみならず地域の学校の支援に大きく貢献しており、また全国の研究会や実践研究の取組をもリードしている。学校運営に関する評議員、教育関連の各種委員等を依頼される教員も多く、本学系教員の研究知見は広く学校教育の実践と経営に貢献しているといえよう。

なお、令和元年度より、改組によって、多くの教員が専門職学位課程のスタッフとなったため、現在本学系に所属の44名のうち、修士課程の所属は5名であり、残り39名は専門職学位課程の所属となっている。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系は、多領域にまたがって教育・研究に取り組み、学会における研究発表と論文の投稿、著書の刊行なども進めている。また、学外においては、国・地方自治体、地域社会、学校等の各種の研修会・講演会の講師や公開講座、出前講座の講師等でも成果を上げている。

科研費の応募も多くの教員が行い、採択もされている。学内においては、学内研究プロジェクトの一般研究として、「グローバル化する地域社会における多様なアクターの連携・協働の促進・展開に見る教育と持続可能なまちづくりの関係に関する研究」、「学習科学に基づくデザイン研究を用いた新たな教育の創出—学校におけるハイブリッド型授業の実践と評価—」、「Society5.0における教員のICT活用指導力を向上する拡散型教員研修の開発」の3件が、前年度から継続する本学系教員が代表を務める研究である。

課題としては、学系の組織の在り方を再検討する必要がある。本学系の構成員の現在のコース所属は6コースあるが、これだけ多くのコースにまたがっている学系は他に存在しないし、本学系のみが構成数でも他の学系の2倍になっているからである。

② 臨床・健康教育学系

ア 研究の特色

本学系では、臨床心理学に基づく、いじめ、不登校、発達障害、非行、虐待、自殺、犯罪被害、地震災害などの問題解決に向けた研究、障害による特別な教育的ニーズのある子どもの教育、心理・生理、教育課程・指導法などに関する研究、学校教育の円滑な実施とその成果を確保していく上で最も基盤となる児童生徒の健康に寄与する理論や方法に関する研究の推進に努めている。具体的には、心理教育相談センター、特別支援教育実践研究センター、健康教育研究センターをはじめとする臨床研究の場において、学校における喫緊の課題に対応するための臨床的、実践的研究を行った。また、学校のみならず、地域社会における、健康教育（学校安全、学校保健）や健康課題への対応に関する研究も行った。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、各センター及び地域の学校等において多様な臨床研究を展開した。これらの成果は、『上越教育大学心理教育相談研究』や『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』の他、関連学会や大学紀要等において公表した。

研究活動の一環として実施した令和3年度の学内研究プロジェクトは、次の6件である。

- ・子どものデジタル機器の過剰使用に関する抑制因の解明と予防教育の実践
- ・通級による指導の教育課程における学校保健情報の活用に関する基礎的研究
- ・特別な教育的ニーズのある子の算数の学習支援方法の開発Ⅱ
- ・教員がシステム論的家族療法を学び、子ども支援を行う意義について-質的分析に基づく検討
- ・聴覚障害児を対象とした音声の韻律情報を振動で伝える日本語文法教材の検証
- ・社交不安が強い子どもに対する集団認知行動療法の効果

また、科学研究費補助金により、各研究代表者として次の7件の研究を実施した。

- ・健康管理に特別な配慮を必要とする子どもの教育的支援に関する地域連携モデルの構築
- ・健康障害児の自尊感情を支える教科指導プログラムの開発
- ・知的障害・ASD児の授業づくりにおけるチームティーチング
- ・行動コンサルテーション実施を支援する「学級支援尺度」の開発と運用マニュアルの作成
- ・若手教員におけるメンタルヘルスの影響因とその対処に関する研究
- ・聴覚障害児を対象とした格助詞学習のための教材開発と指導法の検討
- ・知的障害児の実行機能特性の解明と教育的支援モデルの構築に関する認知神経科学的研究

以上のように、本学系では、それぞれの領域の専門性を活かした活発な研究活動を展開した。今後も、学系を構成する各領域や、構成員が兼務教員となっている3センターにおける人的及び物的資源の充実を図り、地域の教育の発展に一層貢献できるように、教育・研究活動を推進していく必要がある。

③ 人文・社会教育学系

ア 研究の特色

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は、国語学、国文学、国語科教育、書写書道、英語学、英語科教育、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学、地理学、地誌学、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育、国際理解教育、日本語教育と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため、教科に関する組織として、本学系の教員と多数の卒業生、修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」、「上越英語教育学会」、「上越教育大学社会科教育学会」の3学会が組織・運営されており、当該学会における発表及び論文執筆等を含む活発な活動がなされている。またこうした活動の他、各教員が所属する領域の専門学会における口頭発表やポスター発表を行い、毎年優れた論文を各専門学会誌に投稿するなどして、掲載された論文はそれぞれの専門領域で高い評価を得ている。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

上記のように、人文・社会教育学系に属する主な研究領域は、国語学、国文学、国語科教育、書写書道、英語学、英語科教育、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学、地理学、地誌学、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育、国際理解教育、日本語教育と多岐にわたっている。

特筆すべき点としては、まず、各教員が所属する上述の専門領域に関係する学会において、各種の学会賞や論文賞を授与されてきたことも本学系の大きな特色である。令和3年度は国際的に評価の高いJournal of Phoneticsへの論文掲載も見られた。また、公開講座、出前講座、免許認定講習等の講師を含め、他大学・専門学校等における非常勤講師等で多大なる学内貢献・学外貢献を行って成果を上げてきた。令和3年度も、本学系の教員が運営に係わる教科内容先端研究センターでは上越市と共同で連続フォーラム「地域課題からみた学校教育と将来像」をオンラインで開催するなどコロナ禍にあっても精力的に活動を行った。更に、科学研究費の採択に関しても毎年多くの所属教員から応募があるが、令和3年度の科研費獲得状況も基盤研究B「モノ資料からみる近代アイヌ社会と文化」が新規で採択されるなど極めて良好であったと言える。

一方、令和4年度からの教職大学院への移行を直前に控え、修士論文に代わるどのような研究を大学院生に課すのかなど院生の研究支援体制に関しては検討を重ねた。所属の教員についても、これまでの専門研究に加え、教職大学院に所属する教員としての実績づくりなど、実践的な研究についても真摯な検討が望まれる。

④ 自然・生活教育学系

ア 研究の特色

自然・生活教育学系は、数学、理科、技術、家庭の4つの専門分野の教員によって構成されている。

数学の分野では、代数学、幾何学、解析学、数学教育学における専門的研究を推進させるとともに、各教員の学術的知見に基づいた算数・数学教材の開発を行った。特に、「数学授業におけるパフォーマンス評価を伴う関数教材及び単元の開発研究」（代表 高橋等）が上越教育大学研究プロジェクト（特別研究）（令和2年度、3年度）に採択されており、パフォーマンス評価を伴う数学授業で扱う教材を開発し、それらの教材を含む単元を構築することを目的とした研究の2年目を遂行した。また、「上越数学教育研究」37号を刊行し、教員ならびに大学院修士等の研究論文を公表することにより、継続して算数・数学の授業に直結した教育研究を行っている。

理科の分野は、教科教育学と教科内容学の学問領域から成り立っている。前者は理科教育学、後者は物理学、化学、生物学、地学からなっており、相互に影響し合いながら理科の分野を構成している。理科教育学では、カリキュラム論、探究学習、理科の授業論、科学概念形成、理科評価論、問題解決、防災・減災教育など、現在求められる課題を含めて多様な分野の研究をした。これらは学校における理科の授業実践などを改善することにつながっている。教科内容学では、固体物理学、分析化学、動物、植物、化石、星間物質を対象に各教員が自分の専門領域の研究を行うとともに、その成果をもとに物理学、化学、生物学、地学における教材開発や素材の研究を行うなど各教員の専門性を背景とした教育研究を行った。これら2つの学問領域により理科分野では、子どもたちの資質・能力を高めることを目指している。また、大学・大学院改革に関わる情報を複数の大学から収集して、教育課程について検討した。さらに、各教員は外部資金の応募に取り組み、研究を深めようとするとともに、上越地域の小・中学校の理科の教員が主催する上越物理・化学同好会や上越科学技術教育研究会のメンバーとなり、会が主催する発表会の講師になるなど地域の理科教育の発展に努めた。

技術の分野では、エネルギー変換技術の研究や、プログラミングやICTに関する技術、木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに、全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。また、これら教育研究の成果を基に、科研費や研究プロジェクトなど、学内外における各種研究補助金などに積極的に応募している。学内の研究補助金としては、令和2年度から3年度学内研究プロジェクトに、「初等・中等教育における次世代型プログラミング学習システムと学習指導案の開発および実践評価」（代表 大森康正）が採択された。この研究プロジェクトは、金沢市および妙高市の教育系団体、柏崎市内および石川県内の中学校2校との共同研究として実践を中心とした研究を行っている。その成果については学会等で発表すると同時に、新潟県立教育センター主催の研修会などにおいて、地域の教員等に対して成果の還元が行われた。さらに、学外活動として、上越市内、妙高市内において小・中学生を対象にプログラミングや材料加工に関する学習指導・実践を対面およびオンラインでも行っており、学校現場の課題に対応した取組や地域貢献活動も積極的に行っている。

家庭の分野では、各専門分野における研究及び教育・実践を通して、社会環境の変化により生じた複雑な生活課題を適切に解決することのできる、専門的な資質・能力を持った人材を育成することを目指している。そのために、各種教員研修や地域貢献も積極的に行っている。特に、令和3年度は、大学院の「課題研究フィールドワーク」において、遡上する鮭の捕獲・加工、発酵食品・味噌の仕込み、分身ロボットを活用した町家のリモート散策などを取り入れ、実践的・体験的内容の充実を図った。また、上越市創造行政研究所と連携し「地域資源」に関するセミナーを実施した。上越地域の「魚介類」に造

詣の深い講師による講話の後、参加者を交えた意見交換を行った。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、学生の教員としての資質能力を高めることを最優先に考え、教科教育や教科内容の視座からの教材開発やカリキュラム研究に真摯に取り組んでいる。各々の教員は、講義や卒業研究・修士論文を通して、教科の専門性はもちろん、教員にふさわしい思考力・判断力・表現力を備えてもらうべく、責任を持った学生の指導にあたっている。また、令和3年度におけるコロナ禍においても本学が主催する出前講座等に率先して参加し、地域貢献の役割も果たしている。

国際的に活躍している研究者が複数いることは本学系の特に優れた点であるが、引き続き、学術的評価の高い成果を創出できる研究環境を維持していくことが、今後の課題といえる。さらに、令和4年度からの教職大学院への移行に伴う教育体制の整備・拡充も、重要な課題になるものとする。

⑤ 芸術・体育教育学系

ア 研究の特色

芸術・体育教育学系に所属する教員の主な研究領域は、声楽、器楽、作曲、音楽学、音楽科教育、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論・美術史、美術科教育、体育学、運動学、学校保健、体育科教育といった音楽、美術、保健体育の教科に関連した基礎的及び応用的な研究領域からなる。また、これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり、近隣の学校や地域において音楽や美術、スポーツの普及・発展に尽力するとともに、コンクールや競技会において審査員や競技審判等を委嘱される機会も多い。令和2年度も本学系では各教員の専門を生かした地域貢献活動が活発に進められたほか、教科や領域を超えた学際的な教育、研究が進められた。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本年度の 学内研究プロジェクトとしては、「現代的なリズムのダンスにおけるリズムの取り方に関する実践的研究」（長谷川晃一）を行った。

科学研究費については、「能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築」（基盤研究A、研究代表者：山中玲子、研究分担者：玉村恭）、「教員養成における音楽授業プログラムの国際比較研究：領域横断的な視点から」（時得紀子）、「ダンスの授業効果を高めるために不可欠な基本ステップの動感に着目した指導方法の開発」（研究代表者：長谷川晃一）に交付された。

また、論文は、「教員養成系大学における彫刻表現の『プレフィグラツィオン』に着目した授業の検証に向けた基礎研究 ―シラバス調査による傾向の把握を通して―」『美術教育学研究 54号』大学美術教育学会、pp.313-320、2022年3月（松尾大介、岩永啓司）、「Guidance and Support Mechanisms for Music Teachers Using ICT Software in Composition Classes」、The 13th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research Proceedings of the 13th APSMER 2021 TOKYO（時得紀子）が投稿された。

社会貢献としては、音楽では、新潟県音楽コンクール運営・審査委員（新潟日報社、他）、NHK学校音楽コンクール中越地区、下越地区審査（日本放送協会、他）、「上越市立板倉小学校校歌の作曲」、高田木曜会合唱団指導（年間）、「音楽分野教員と学生によるガラコンサート」が行われた。また、課題研究フィールドワークの一環として、音楽分野では妙高市文化ホールとの協業による演奏会「Juen×Myoko コラボコンサート」を計6回開催し、受講生は社会教育における音楽の果たす役割について学習し、また日頃の演奏研究の成果を地域貢献事業として還元することができた。

美術では、「新潟県立大潟水と森公園『かっぱ像』制作」（大潟水と森公園開園20周年記念事業への協力）、「ヨリ・ミチ図工室（小林古径記念美術館との連携事業）の企画運営」、「生誕90年岩野勇三彫刻展における市民向けワークショップ及びシンポジウム」（小林古径記念美術館との共催による企画と運営）、「なおえつうみまちアート」（地域活性化の包括連携協定に基づく現代アートイベント）実行委員及び、ワークショップ開催」、「新潟県立近代美術館協議委員」、「妙高ジュニア芸術展の審査」、「ふるさとの風景展」（喜多方市美術館）の展覧会審査」他、を行った。

保健体育では、新潟県幼児期運動習慣アップ支援事業アドバイザー（新潟県スポーツ課）、妙高市教育委員会幼児の運動指導アドバイザー、上越市立体操場「ジムアリーナ」の活用に関するアドバイザー、上越市教育委員会健康づくり推進課・スポーツ推進課と共同した上越市オリジナルの健康運動プログラム教室「上越一健康運動プログラム教室」（J-WELLNESS）講師、新潟県立武道館開館における体力測定

事業（高齢者向け）に関する体力測定プログラムの立案・提供、上越教育大学地域貢献事業「剣道で培う心・技・体」、運動部活動指導員研修会講師（附属中学校、妙高市教育委員会）等に参画した。

教科横断では、上越市スポーツ推進審議会委員（会長）（上越市教育委員会）の他、上越市、魚沼市、妙高市、長岡市、三条市の小中学校教員向け研修会の講師を務めた。

このように学系所属の教員により活発に研究が進められ、その成果が地域社会に様々な形態で還元された。

今後の課題として、令和4年度の教職大学院への移行に伴う大学院の定員確保の観点も含め、本学がより魅力ある研究機関であることを発信するためにも、さらなるそれぞれの専門領域に関する研究の充実、社会貢献も含めた研究内容の還元や地域事業への積極的な参画などが挙げられる。